

遊牧民トゥアレグの伝統的な住居

著者	今村 薫
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	48
号	1
ページ	9-18
発行年	2011-07-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000382

遊牧民トゥアレグの伝統的な住居

今村 薫

1. はじめに

トゥアレグは、北西アフリカに住むベルベル系の遊牧民である。彼らはアルジェリア、マリ、リビア、モーリタニア、ニジェール、ブルキナ・ファソにまたがるサハラ砂漠と、その南縁のサヘル地帯に暮らしている。総人口は200万人弱といわれ (Keenan, 2004), そのうちニジェールにおよそ100万人、マリに約67万5千人が住む。ただし、以下に述べるようにトゥアレグの伝統的社会は階層社会であり、トゥアレグへの帰属意識は階層によって異なるので、総人口を明確に数えることはできない。

トゥアレグの伝統的社会は、アメノカルと呼ばれる首長を頂点に、戦士イムシャル、従臣イムガド、イスラーム聖職者イネスレラン、職人イナハダン、奴隷エクランからなる超部族的な階層社会を形成してきた。戦士階級は、他集団との間の戦闘や家畜の略奪、また、ラクダの飼育とキャラバン取引に従事し、馬や牛も一部で飼った。従臣階級の人々はヤギ、羊などの中型家畜を中心に飼育した。職人集団は金属製品、木工製品、皮製品、装飾品を製作した。

奴隷エクランは、各地から連れてこられた黒人たちで、家畜の世話やキャンプの雑用、井戸の掘削労働や補修をおこなった。この非自由民の存在を認めた制度は、現在ほどの国においても法的に廃止されているが、エクランという集団名自体は現在も残っている。そして、このエ

クランに属する人々が、自分をトゥアレグと見なすか否かは、個人によって大きく異なる。エクランの出自を隠し自分をトゥアレグと見なさない人、さらにトゥアレグを憎悪する人々もいる一方で、まったく自分の出自を気にせず、かつての主人筋にあたるイムシャルやイムガド階級の人と友好的な関係を続けるエクランも多い。

トゥアレグの母語は、ベルベル語 (アフローアジア語族に属す) の一種のタマシエク語 Tamasheq である。トゥアレグという民族名は、かつての支配階級だけを指すと見なす立場もあるので、被支配階級であった人々も含めた集団の自称として、「タマシエク語を話す人々」を意味するケルータマシエク Kel Tamasheq を用いることもある。

伝統的な生業形態は、ラクダ、牛、ヤギ、羊を飼って一定の土地を遊動する牧畜である。現在は、家族は村に定住しながら、男性がサハラ砂漠で遊牧する人のほかに、集落に定住して家の近くで牧畜と農業をおこなう人、町に住んで商業活動をおこなう人などがいる。近年は定住する人が増えている。

彼らの伝統的な住居は、移動に適した組み立て式のものであるが、皮を張ったテントのほかに、ウールの布地のテント、また、ヤシの葉で編んだ菰を支柱にかけたもの (Pandolfi, 1994; フェーガ, 1985=1979) など、地域によってヴァリエーションがある。定住集落では、堅牢

な日干し煉瓦の小屋を建て、庭にテントを張っている人が多い。

この小論では、トゥアレグのテントについて民族建築学的な視点から論考する。具体的には、テントの材料や寸法、平面図などの基礎的資料に加え、テントの手入の方法、風雨などの気象に合わせたテントの使用法、テントにおける居住空間の配置などを報告する。

トゥアレグの住居の各部の寸法は詳細に決められている。そして、その寸法の単位は、それぞれのテントの作り手の腕や手などの身体の長さに基づいたものなので、テントの大きさは一律ではなく作り手ごとに異なる。本稿では、このような身体尺を用いてテントを作ることの意義について考える。

皮を縫い合わせて天幕を作るのは女性であり、移動先のキャンプでテントを建てるのも女性である。また、女性は、テントの皮を毎朝広げては夕方に畳み、皮に穴があいていないか、弱くなった部分がないかを点検し、修繕している。このような、テントの製作から日常的な手入れを通じて、住居が女性の身体の延長として機能していることを示す。

2. 方法

私は、2006年以来、マリ共和国およびアルジェリア共和国でトゥアレグの牧畜文化についてフィールドワークをおこなっている。その調査の一環として、トゥアレグの住居の種類、住居の建て方、住居空間の使用例などを調べてきた。本稿において詳細に紹介する住居は、マリ共和国のトンプクトゥ北部に住むF夫人（2007年当時、50歳）のテントである。

F夫人の一族はイスラーム聖職者階級イネスレランに属するが、昔から砂漠で家畜を飼って

遊牧していたという。F夫人は未亡人であり、砂漠では次男夫婦と一緒にいた。次男は、一年に数回、家畜を売って穀物を買いにトンプクトゥの街に出てくる以外は、年中トンプクトゥ北部の砂漠で遊牧生活を送っている。

F夫人は、トンプクトゥの街中に日干し煉瓦の家を持っているが、一年の半分以上は次男夫婦と砂漠の中のテントで暮らす。

2007年9月に私がキャンプを訪問したときは、F夫人は自分のテントを一つ建て、そこから約30メートル離れたところに次男夫婦が別のテントを建てて生活していた。

F夫人と次男のキャンプから200メートルほど離れたところに、M氏一家が住んでいた。M氏は奴隷階級エクラン出身だが、テントの構造や家畜の飼い方などの暮らし方は、F夫人一家とまったく同じだった。M氏一家とF夫人一家は、互いにキャンプを訪問し合い、会話や食糧のやりとり、作業の手助けなどをおこなっていた。

F夫人とM氏のキャンプから半径2キロ圏内は、他に誰も住んでいなかった。

私は、2007年9月の約1カ月に、テントの建て方や各部分の大きさの聞き取り調査をおこなった。また、テントの各部分の長さを計測し、テントの日常生活での使われ方を観察した。伝統的な住居の使い方については、他の古老からも聞き取り調査をおこなった。

3. テントの詳細

3-1 平面図と名称

トンプクトゥ地方のトゥアレグは、ほとんどのテントが南北に棟木を渡して建てられている。(Fig. 1) これは、雨季、乾季を問わず、一年中、北側から風が吹いてくるからである。

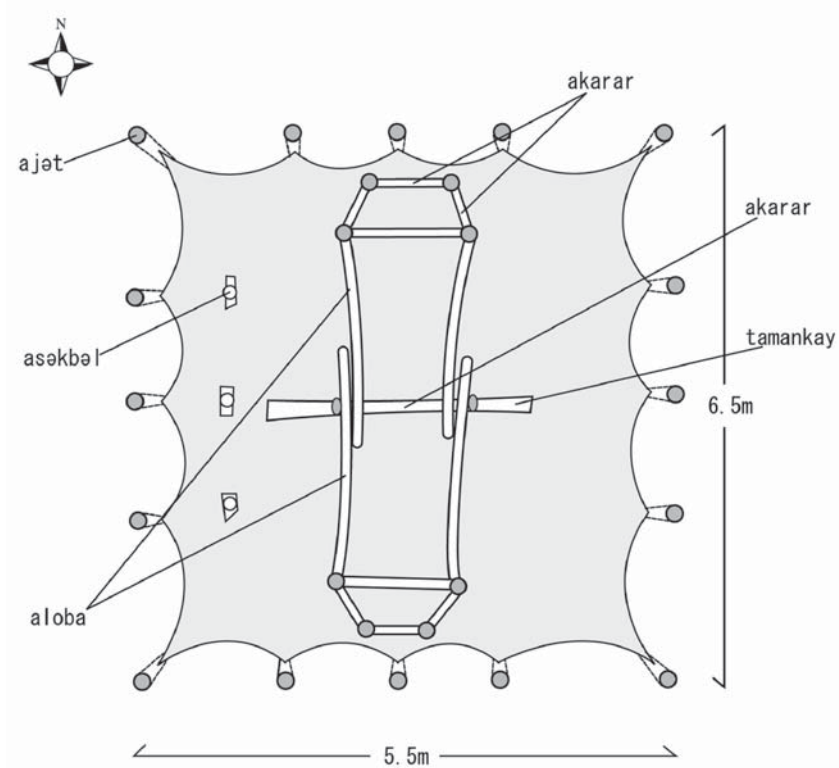


Fig. 1 The plane figure and the name of each part of a tent

入り口は、東側、あるいは西側だが、後述するように、太陽の高さや風向き、雨の吹き込む向きによって、どちらかの側の皮を低く張って入り口をふさぐことがある。

F夫人のテントは、南北方向に5本、東西方向に5本の杭ajëtを立ててある。杭で囲まれた長方形の大きさは、南北方向に約6.5メートル、東西方向に約5.5メートルだった。テントを覆う皮は、柱に縛り付けるための皮紐täsdästで柱に縛り付ける。(各部の名称はTable 1にまとめた。)

南北方向の杭につなぐための皮ひもの数(杭の数と一致)は、テントの大きさを表す指標になる。たとえば、「5つの皮ひものテント(Ahëkkum wän 5 täsdäst)」のように表現する。標準的な南北方向の皮ひもの数は5だが、大き

なテントになると7になる。

東西方向の杭の数は5と決まっている。まれに、東西方向の杭が4本のテントがあるが、この場合は、覆い皮の中心部分であるtejärijärtが欠けた変則的なテントになる。

棟木älobaは南北方向に2本取り付けてある。これを2本の大黒柱tamänkäytがささえる。F夫人のテントの場合は2本だが、「7つの皮ひものテント」のように大きなものになると、大黒柱は4本、あるいは6本に追加される。(Fig. 2)

棟木の両端は、「荷物置きteje」と呼ばれる椅子型の構造物によって固定される。2本の棟木をつなぐ短い横棒、およびtejeを形作る横棒をäkärarという。

「荷物置き」に積まれた食料、食器、衣服を、風雨、砂、家畜から守るために、草で編んだ

Table 1 Vernacular names of each part of the tent

English	Tamasheq	
	Single	Plural
house	ehǎn	ihanǎn
Roof skin	ahǎkkum	ihǎkkǎm
skin string with roof	ǎzzǎmmi	izzǎmmǎy
skin string for stitch	tǎsdǎst	tisdǎs
rope	tayǎnt	tiyun
ridge pole	aloba	ilobǎn
central pillar	tamǎnkǎyt	timǎnkayen
prop	tajǎtewt	tijǎtwen
bar	ǎkǎrǎr	ikararǎn
Stake	ajǎt	ijǎtǎn
baggage side	teje	tǎjiwen
pole for windshield	asǎkbǎl	isǎkbǎl
windshield	tasatit	tisutǎy

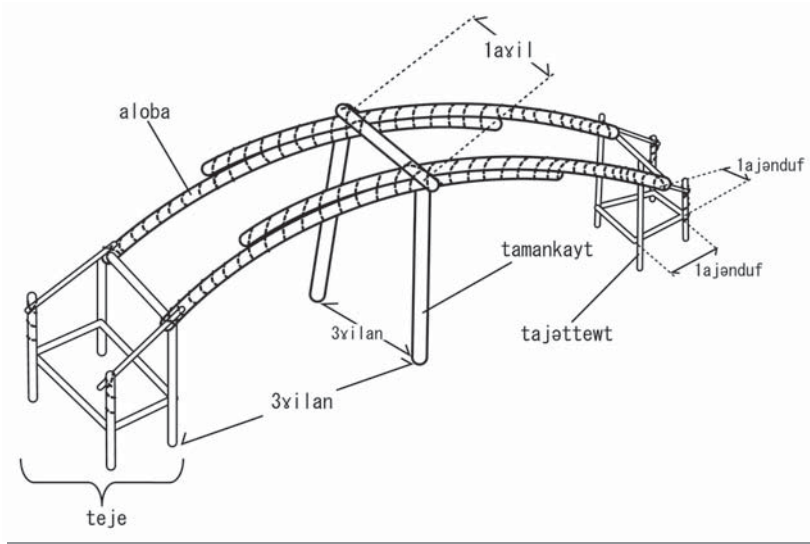


Fig. 2 The frame of the tent

ゴザ状のカバー *tasatit* を「荷物置き」全体に巻きつける。風雨が強くなると、*tasatit* を伸ばして、風雨がテント内に吹き込むのを防ぐ。このとき、*tasatit* は、柱 *asǎkbǎl* で固定される。この柱 *asǎkbǎl* は、しばしば彫刻とペイントによって美しく装飾される。

3-2 テントのサイズ

トゥアレグのテントの各部の大きさは、厳密に決まっている。その長さの単位は、人間の身体の長さを基準にしたもので、以下の3種類がある。(Fig. 3)

- 1) *ayil* (単数形), *yilǎn* (複数形)

ほぼ、前腕の長さである。尺骨内側顆の頂点

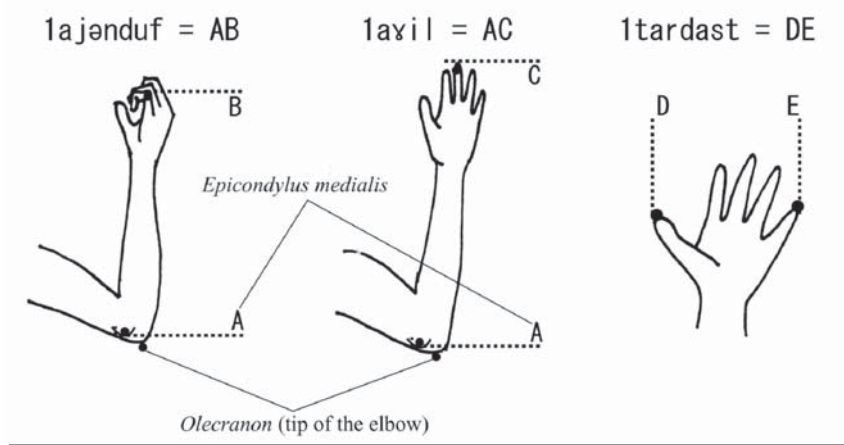


Fig. 3 The unit for length along body size

から中指の先端までである。

2) *ajənduf* (単数形), *ijəndəf* (複数形)

1 ajənduf は、*1 ayil* より短い。尺骨内側顆の頂点から小指の第一関節までの長さである。

3) *tərdəst* (単数形), *tərdəsən* (複数形)

指を広げた親指の先端から、小指の先端までの長さ。

これらの長さには、もちろん個人差があり、それぞれのテントを作る女性の身体を基準に、その長さが決められる。F夫人の場合、*1 ayil* は46cm、*1 ajənduf* は35cm、*1 tərdəst* は18cmであった。

まず、テントを覆う皮の大きさを記載する。皮は13の部分に分けられ、それぞれに名前がついている。(Fig. 4) 皮の四隅に位置する *ayəytulu* の幅は、5.5 *yilän* と決まっている。*ayəytulu* 以外の場所は、すべて *takəytäməst* と呼ばれ、*takəytäməst* は2つの部分に分けられる。中央側が *atakor* で端側が *ijəm* である。*atakor* の幅は3 *yilän*、*ijəm* の幅は2.5 *yilän* である。

テント中心の棟木の上に乗る部分の皮は、*tejərijärt* といわれる。*tejərijärt* の幅は *1 ajənduf*

で、長さは20 *yilän* と決まっている。

これらの部分をすべて併せると、覆いの皮は、幅が11 *yilän* と *1 ajənduf*、長さが20 *yilän* になる。

皮を杭につなぐ皮ひも *təsdəst* の長さは、*1 ayil* と *1 tərdəst* である。

このように細かく皮が分割されて呼ばれるのは、覆いの皮が部分ごとに常に修繕されるからである。穴が開いた部分の皮だけを取り替えながら、テントは常に最善の状態に保たれる。皮の中心にある *tejərijärt* は、もっとも厚い皮を使って頑丈に作られる。四隅の皮 *ayəytulu* は、引っ張りや擦れによって、消耗の激しい部分であり、頻繁に穴を繕ったり、部分ごとに皮を交換したりする部分である。

皮は、一番新しい状態から、古い状態へ順に、*ahəkkum*、*ehəkket*、*ebərsəj* と呼び名が変わる。覆いにはヤギ皮が最適だが、羊皮も使われる。牛皮は、雨に濡れると縮むのでよくないとされる。

皮を縫い合わせるときは、目打ちで穴を開け、そこに子羊の皮を細く切って糸状にした細紐 *əzzəm* を通す。地方によっては、この

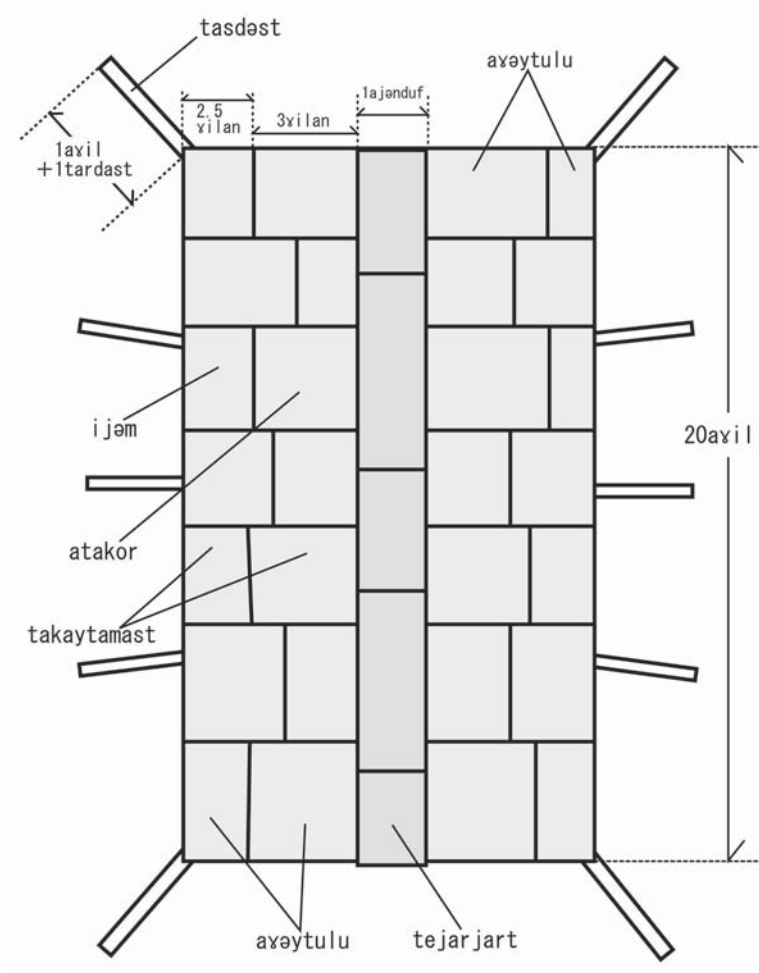


Fig. 4 The size of the roof skin

とき、装飾用の革紐も一緒に覆いにとじ合わされるので、完成したテントの天井から大量の色とりどりの紐が風に揺らぐことになる（フェーガ、1985=1979）。

支柱の長さも決まっている。(Fig. 5) 大黒柱 *tamänkäyt* の長さは6 *yilän* で、そのうち2 *yilän* は、地中に埋められている。したがって、テントの高さは、約4 *yilän* である。F夫人のテントの場合、テントの高さは175cmであった。2本の大黒柱は3 *yilän* の間をあけて地面に建てられる。棟木をわたす横棒 *akarar* の長さは1 *ayil* である。

椅子型の「荷物置き」を構成する横木 *äkärär* の長さは、1 *ajënduf* である。

柱と棒は、ヤギ皮で作ったロープ *tayänt* で縛って連結する。

ゴザ状の衝立は、幅（立てた場合の高さ）が3 *yilän* である。これが普段立てかけられている「荷物置き」の支柱は、長さが4 *yilän* で、約1 *ayil* 分、地中に埋められている。つまり、支柱の地上部とゴザの高さはそろっている。

3-3 形を変えるテント

トゥアレグの女性は、毎夕、日が沈むと皮

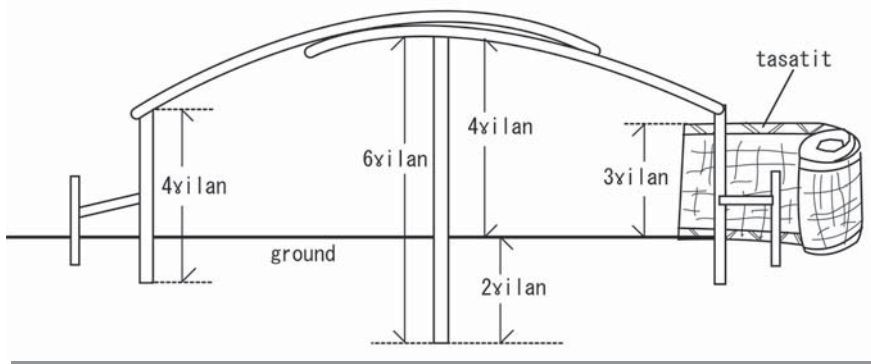


Fig. 5 The length of each pole



Photo. 1 日中のテント

の覆いを東側と西側の両側から中心へ向かって折りたたみ、アーチ型の棟木に乗せる。昼夜張りっぱなしだと、皮が伸びきって傷みがはやくなるからである。翌朝、日が昇ると覆いを伸ばしてテントを張るが、午前中は、東側を低めに張って朝日が差し込むのを防ぐ。そして、太陽が高くなると、両側の覆いを高く上げてペグに固定し、風を通りやすくする (Photo. 1)。午

後は、午前中と逆に西側を低めに調節する。このようにして、西日が差し込むのを避ける。

風雨が強いときは、風上側のテントの紐を完全にほどき、だらりと棟木から垂直に皮の覆いをたらす。こうすると覆いの端は地面に届き、風上側のテントの口を閉じた形になる。さらに、覆いの内側にゴザ状のカバー *tasatit* を垂直に立て、テントの中に雨水が流れ込むのを防



Photo. 2 日暮れとともにテントをたたむ

ぐ (Photo. 2)。

また、短期間しか滞在しないときは、テントの棟木を立てずに支柱（大黒柱）を1本だけ立てて三角形のテントにする。

その他、地域によっては、ドーム型の棟木を作らずに、正方形の枠に4本の支柱をつけたフレームに皮の覆いをかけて平坦な形のテントを建てることもある (Pandolfi, 1994)。私も、マリ西部のレレ地方で平らな屋根のテントを見たことがある。

3-4 使用空間の分離

北側の「荷物置き場」は「女の荷物置き場」と呼ばれ、皿、スプーン、臼、杵、篩、箕、バターを作るための皮袋などの調理具、女性の衣服、装飾品が入った箱が置かれている。棚の下には、ミルクが入った鉢が置かれている。

南側は「男の荷物置き場」と呼ばれ、男性の衣類が入った鞆、タバコ、米や雑穀の入った重い袋、毛布などが置かれている。

女は北、男は南という配置は、シンボリックな意味を持っているわけではない。トンプクトゥ地方では北風が吹く場合が多いので、食物に砂が入り込まないように、北側の「荷物置き場」の陰で調理し、南側には重い荷物を置いてテントが風に飛ばされるのを防ぐためという合理的な理由から、北側が「女の荷物置き場」に、南側が「男の荷物置き場」になっているという。

このような気象条件に合わせた理由から男女の荷物置き場が決まっているが、それがそのまま男女の空間分離になっている。とくに客が訪問してきた場合は、男性は南側に、女性は北側に座る。砂の床にゴザと絨毯を敷き、男女ともクッションを並べて寝そべるように身体を横たえて談笑する。

客人には、茶を入れてもてなす。トゥアレグが好んで喫飲する茶は、緑茶（中国産）を苦く炊きだしたものに大量の砂糖を入れ、小型のガラスのコップに泡を立てながら注ぎ入れたものである。しばしば男性が茶を入れる。

4. 考察

人体や人間の能力に基づいて考案された単位を「身体尺」という。日本の伝統社会で使われた中国由来の尺や寸、古メソポタミア起源でギリシャ・ローマで使われたキュビット、ヨーロッパで広く使われるフィートなどは、すべて身体尺であり、それぞれ、人間の手、腕、足の長さから生み出された。

近代化とともに、身体尺は廃れ、物理的な現象に基づいた単位（メートル法など）が使われるようになったが、建築の分野では、フランスの建築家ル・コルビュジエが身体尺をもとにしたモジュロールという概念を提案したことがある（ル・コルビュジエ、1976=1948）。モジュロールとは、人体の寸法と黄金比から作った建造物の基準寸法の数列のことである。人が立って片手を挙げたときの指先までの高さを黄金比で割り込んで出した数字によって、建築や家具の細部の大きさを決めていけば、機能的な居住空間が作られるという。

トゥアレグの長さの単位である *ayil*（複数形は *yilän*）、*ajønduf*（複数形は *ijøndäf*）、*tärdäst*（複数形は *tärdasen*）も身体尺である。前述の尺寸、キュビット、フィート、そしてモジュロールも、使用される社会の「平均的」な身体の長さをもとに、それぞれの単位の長さが一律に決められているが、トゥアレグの身体尺は、各人の身体に応じて長さが個別である。

トゥアレグで頻繁に使われる身体尺の *ayil*（複数形 *yilän*）は、尺骨内側顆の頂点から中指先端までの距離である。

しかし、一般に、前腕の長さというと肘頭から中指までの距離を思い浮かべる人の方が多いのではないだろうか。実際、キュビットは、肘頭から中指までの距離である。前腕の長さを、

肘頭からとる場合と、尺骨内側顆からとる場合は、どのような違いが背景にあるのだろうか。

作業をしている本人が、自分自身の身体を使って皮や布の長さを測るときは、腕の内側にある尺骨内側顆を皮などにつける方が平易である。トゥアレグの *ayil* は、製作者が道具を作る身体に動きとともにある、いわば「内からの」身体尺である。

一方、肘頭から距離をとる場合は、自分以外の他人の身体を外から測る、「外からの」身体尺である。これは、作業する人とは別の人の身体から編み出された長さの単位なのである。

また *ayil* は、女性が作るテントだけでなく、男性のターバンや、井戸水をくみ上げる綱などの長さの単位でもある。ターバンの長さは 18 *yilän* と決まっており、ターバンも綱も、それを使う男性の前腕の長さを基準としたサイズになっている。平均的な身長男性では、1 *ayil* は、約 50cm だという。

現在の寸尺やフィート、インチなどは、もともと人間の身体の長さによって 1 単位の長さで決められたものだが、時代を経るに従って為政者の意向や、その単位を使う人々の利便性のために、徐々に、標準化され、一定の長さに統一されていった。

しかし、トゥアレグの身体尺は、現在も、個人の身体に合わせて、個別の長さのままである。トゥアレグの身体尺は、道具を、そのモノを作り使う人の、文字通り「身体に合わせて」機能させている。

とくにトゥアレグの伝統的なテントは、それを作り出す女性の身体の延長として存在する。女性の腕を使って長さが決められ、縫い合わされたなめし皮と、彼女の身体に合わせて作られた支柱から、一つのテントが作られる。そのテントを、トゥアレグの女性が、毎日、広げ伸ば

し、折りたたみ、支柱から外したり、ぴんと強く張ったり、穴を繕ったりして、手入れする。そのような人間の身体から紡ぎだされた私的で安全な空間が、テントによって作られ、砂嵐、雨風、日差しといった厳しい環境に、皮と柱という最小限の物質で対峙することを可能にしているのである。

(本稿は、2009年度名古屋学院大学研究奨励金と科研基盤(s)「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究(代表:嶋田義仁,平成21~25年度)による研究成果の一部である。)

引用文献

- フェーガ, トーボ 1985『天幕—遊牧民と狩猟民のすまい—』磯野義人訳, エス・ビー・エス出版
(Faegre, Torvald 1979 *TENTS: Architecture of the Nomads*, Anchor Books, New York)
- Keenan, J. 2004, *The Lesser Gods of the Sahara: Social Change and Contested Terrain amongst the Tuareg of Algeria*, Frank Cass, London
- ル・コルビュジェ 1976『モデュロール I』吉阪隆正訳, 鹿島出版会 (Le Corbusier 1948, *Le Modulor*, Helena Strassova, Paris)
- Lhote, H. 1984 *Les Touaregs du Hoggar*, Armand Colin. Paris
- Pandolfi, P. 1994 *L'habitat du Hoggar: Entre tentes et maison: la hutte*, Karthala, Paris